

ナルニア国物語 第1章ライオンと魔女

2006(平成18)年1月17日鑑賞(試写会・梅田ビカデリー)

★★★★



第1章

見逃した人は必読!

監督・製作総指揮=アンドリュー・アダムソン/原作=C.S.ルイス/出演=ジョージ・ヘンリー/スキャンダー・ケインズ/ウィリアム・モズリー/アナ・ポップルウェル/ティルダ・スウィントン/ジェームズ・マカヴォイ/ジム・ブロードベント/ジェームズ・コスモ/声の出演=リーム・ニーソン/レイ・ウィンストン/ドーン・フレンチ/ルパート・エヴェレット (ブエナ ビスタ インターナショナル (ジャパン) 配給/2005年アメリカ映画/140分)

……『ロード・オブ・ザ・リング』の原作『指輪物語』と並ぶ、20世紀を代表するイギリスの作家 C.S.ルイスの超大作が遂に映画化。ナルニア国とは？ その歴史とは？ そしてなぜそこにも戦いがあるのか？ さらに、ライオンの姿をしたアスラン王と「白い魔女」とはどんな因縁が？ そして、この映画の主人公となる、2人のアダムの息子と2人のイブの娘とは？ 日本人には全く想像もつかない国ナルニアを、あなたはいかにイメージできるか？ そして『ロード・オブ・ザ・リング』と同じように、「第1章」以下続いていく複雑なストーリーにどこまで迫れるか？ 全米No.1の大ヒットだが、あなたの感性と知性が試されることになる、この映画は、果たして島国ニッポンでも大ヒットするだろうか？ そのキーワードは、ただ1つあなたの「想像力」……。

『ナルニア国物語』とは……？

『ナルニア国物語』とは、20世紀を代表するイギリスの作家 C.S.ルイスの著書で全7巻からなるもの。そしてこれは、ほぼ同時期に書かれた『ロード・オブ・ザ・リング』の原作となった『指輪物語』と並ぶ壮大なファンタジーの最高傑作とのこと。なおイギリスには、この他にも『ハリー・ポッター』の J.K.ローリングもいるから、さすがやっぱり大英帝国……？

この『ナルニア国物語』が誕生したのは1950年。そしてそこで描かれるのは第

2次世界大戦下のイギリスであり、主人公はペベンシー家4人の兄弟というから、それ自体はファンタジーではなくごく現実的な世界。しかし、その4人が預けられたカーク教授のとてつもない広い屋敷を探索中にみつけた衣装だんすの向こうに見えたものは……？ そこが神秘の国「ナルニア国」。

さあ、ここから途方もないファンタジーの世界へ観客を引きずり込んでいくわけだが、この映画はその第1章のみ……？ 小説にすれば、何と2555年にも及ぶ世界らしいから、このシリーズは今後いつまで続くのか……？ そしてまた、そんなナルニア国のファンタジーとは？

アメリカでは大ヒットだが……？

この「第1章」が全米初公開されたのが2005年12月9日。パンフレットには、オープニング3日間の成績が6710万ドル（約70億円）とあるし、1月19日に届いた『キネマ旬報』2月上旬号によれば、12月9日～12月15日の1週間で8133万ドル（約90億円）とあるからものすごい数字（ちなみに同誌によれば、『男たちの大和／YAMATO』は予想どおり大ヒットし、40億円が当面の目標とされているとのこと）。日本での公開は来る2006年3月4日。さて日本でも、『ロード・オブ・ザ・リング』や『ハリー・ポッター』と同じように大ヒットするだろうか……？

イギリスにも空襲や疎開が……？

戦後60年の平和を享受してきた日本では、今や「先の大戦」が太平洋戦争（大東亜戦争）（1941～1945年）のことを指すこと自体を知らない若者がいるとのこと。さらに、今は世界一仲のいいアメリカと日本が昔戦争をしたこと自体を「ウッソー！」と叫ぶ少女までいるらしい……？ そんな若者たちは、イギリスがドイツと戦争したことや、イギリスの首都ロンドンがドイツの爆撃機によって空襲にさらされ、子供たちが田舎に疎開せざるをえなくなったことなど知る由もないはず。

この『ナルニア国物語』は一大ファンタジー物語だが、その原作者はイギリスでこの苦しい戦争を体験した人物。したがって、物語の冒頭はファンタジーでも

何でもなく、えらく現実的なシーンから始まることに。これにはきっと観客はとまどうはず……？　そこで私はあらためて、「ドイツ空軍による爆撃に耐えて、いつか必ず反撃しよう！」とイギリス国民に対してチャーチル首相が演説していた映像を思い出すとともに、「空襲」「防空壕」「疎開」という言葉も懐かしく思い出すことに……。

キーパーソン（？）は「白い魔女」と「アスラン」

この物語を理解するうえでのキーパーソン（？）が次の2人であることは、映画のサブタイトルからも明らか。まずナルニア国に100年の冬をもたらし、春の来ない国にした、「白い魔女」（ティルダ・スウィントン）。人間の姿をしている彼女は、自ら「ナルニア国の女王」と名乗っているが、それが正当なものか否かは不明……？　美人で賢そうだが、反面ムチャ冷酷なオンナであることが、物語の進行につれて明らかに……。

他方、ナルニア国の王が、雄ライオンの姿をしたアスラン（リーアム・ニーソン）。彼は聖なるものを司らしい……。しかしなぜ彼が100年間も不在だったのか？　そして今なぜ再登場してきたのか？　そして「第1章」ではいかなる役割を果たすのか？　それは映画を観てのお楽しみだが、せいぜい想像たくましくしてもらいたいもの……。

ポイントは衣装だんす……？

ふすま1枚でもベニヤ板1枚でもA空間とB空間を隔てるものがあれば、それによって全くの異世界に。考えてみれば、人間の世界と宇宙人の世界との間の扉だって、どこにどう設定されているのかわかったもんじゃなはず……？　したがって、原作者のC.S.ルイスおじさん（？）が想像をたくましくしたように、人間の言葉をしゃべる動物たちが生きているナルニア国と人間たちが生きている国との境目だって、ホントは扉1枚かもしれない。すると、隠れんぼで衣装だんすの中に隠れた後、ちょっとした偶然で反対側に出たとすれば、そこはもうナルニア国……？　多分そこに行くことができるのは想像力のたくましい少年少女でなければならないのだろうが、どちらにしてもポイントはあの衣装だんすの扉

……？

導入部はちょっと長すぎ……？

ロンドンの爆撃、防空壕、子供たちの疎開とえらく生々しいシーンが続いた後、主人公となる4人の子供たちは、田舎への長い列車の旅を経て、やっとカーク教授（ジム・ブロードベント）の広大なお屋敷に。「家の中で走り回ってはいけません」との忠告を無視して、末っ子が隠れ込んだのが衣装だんすの中。そしてそこを反対側に抜けると、そこはもうナルニア国だった……。しかし、ここに至るまでの約20分は、チト長すぎでは……？

4人のキャラは？

原作者のC.S.ルイスがこの長大なファンタジーの主人公を子供たちだけにするために、あえて親から切り離すためのテクニックとして使ったのが、田舎への疎開だったのかも……。男女男女という4人の兄弟姉妹が集団で知り合いの家に預けられるという境遇になれば、否応なく長男がしっかりしてくるもの。すると逆に次男は多少これに反発し、兄弟ゲンカも……。他方、末娘はみんなから可愛がられるが、お姉ちゃんは少し微妙な立場。おおむねそんなバランスになるものだが、さてこの4人のキャラは……？

主人公はどうしても末っ子に……

長男は責任ばかり負わされるのに対して、みんなから可愛がられ、守られるのが末っ子。そして、現実的にならざるをえない長男や長女に比べて、最も想像力に優れているのも末っ子。したがって、ファンタジーな世界を切り開いていく先導役となるのは当然、末っ子。

最初の出会いは？

ナルニア国への扉を最初に開けたのは、末っ子で次女のルーシー（ジョージー・ヘンリー）。予告編で何回も観たこのシーンは大切に、このシーンでいかに観客の目を引きつけることができるかがこの映画の成否のカギを握るもの。した

がって、しっかりとこのシーンをまぶたに焼きつけてもらいたいものだ。

100年間も冬の状態にあるナルニア国に突然足を踏み入れたルーシーが、最初に出会ったのがタムナスさん（ジェームズ・マカヴォイ）という半神半獣のフォーン。2人の会話は最初こそトンチンカンだったが、そこは幼い子供の特権(?)で、すぐに打ち解けフレンドに。しかし、それはタムナスさんにとっては、ちょっとまずいこと……？

2番目の出会いは？

衣装だんすに戻ったルーシーは、この体験を兄や姉たちに話したが、当然誰も信用せず、逆にルーシーのことを心配する始末。しかし、ルーシーの話を信用しないまでも興味を示したのは、3番目の子供で次男のエドマンド（スキャンダー・ケインズ）。夜中に1人起き出して再び衣装だんすの中に入ったルーシーのあとを追ったエドマンドも、アッと驚く雪の中へ……。

このエドマンドがナルニア国で最初に出会ったのが、「ナルニア国の女王」。何も事情を知らない人は、彼女が悪人だなんてわからないのが当然で、エドマンドは女王の魔法の魅力に魅かれるとともに、次の王位を譲ると言われたことをまともに信用してしまった。ただし、ここで女王がエドマンドに与えた条件は、必ず4人兄弟そろって女王の城に来ること。

優しくて美しい女王の虜になったエドマンドはそれを約束して、再び衣装だんすの中に戻ったが、なぜ女王はそんな条件を……？ それがこの映画のストーリー構成の重要なポイント！

やっと4人そろって……

エドマンドはどのようにして3人をナルニア国へ連れ出そうかと考えていたが、これといういい手段はなかった。しかし、案ずるより産むが易し……。お屋敷の窓ガラスを割ってしまい、骨董品を壊したことで大目玉をくらいそうになった4人は、「さあ逃げろ、やれ逃げろ」とばかりに屋敷の中を走り回った。すると、人間誰しも過去の経験則どおりに動くもの……。4人がやって来たのは、あの隠れんぼの時にルーシーが隠れようとした衣装だんすのある部屋。追っ手(?)が

迫ってくる中、ついに4人はその中へ。すると4人の目の前には、アッと驚く雪の世界が……。

思わず「アンピリーバブル」と叫ぶ長女のスーザン（アナ・ポップルウェル）、そしてルーシーから非難の目を向けられて謝罪する長男のピーター（ウィリアム・モーズリー）だったが、さてこれから4人がとるべき行動は……？

誰が善で誰が悪？ そして誰が味方で誰が敵？

C.S. ルイスが描くナルニア国の物語がファンタジーとされているのは、そのストーリーと多種多様な登場人物（？）によるものだが、そのテーマは「善と悪の戦い」という古典的で普遍的、かつ重厚なもの。誰が善玉で誰が悪玉かは、一応姿カタチや顔つきでわかるようになっていても、特に日本人観客にわかりにくいのが通例。この映画でもそれは同じだが、『ロード・オブ・ザ・リング』よりはまだマシ……？

それはともかく、とにかくこの映画を観る視点として、誰が善で誰が悪か、誰が味方で誰が敵かと考えることが大切。すると、ひょっとしてルーシーとエドモンドはヤバイのでは……？ そう感づくことができたあなたは、想像力豊かな観客というべき……。そう、物語は今後エドモンドをいかにして取り戻すかというテーマを軸として進展していくことに……。

さて、どんな動物が……？

C.S. ルイスおじさんの想像力の面白さは、人間の言葉をしゃべる動物をイメージし、それを具体的な姿として描いたこと。全米オープニングの大ヒットを受けて、既に2作目の製作が決定し、ある日本人俳優が声の出演をすることも決定したと報じられているが、この映画ではこのように声の出演にも大きなウエイトが……。その典型が「アスラン」で、なんとその声の出演は、『愛についてのキンゼイ・レポート』（04年）などで有名なリーアム・ニーソン。

4人の子供たちがそろってナルニア国へ「入国」した後、これを歓迎する動物たちは誰（ナニ）？ そしてこれと敵対する動物たちは……？ 子供のような純真な心でそれを楽しむことが大切だよ。

次第に善と悪との戦闘へ……？

なぜアスランが100年ぶりに再登場してきたのか？ それがこの映画での大きなテーマだが、アスランの登場によって100年間続いた「白い魔女」によるナルニア国の支配は終了するのだろうか？ それでは話は全然面白くないから、きっとアスラン軍団 VS 「白い魔女」軍団の戦いが始まるはず……。それは想定範囲内だし、映画は着々とそれに向けての体制を整えていき、次第にスクリーンはヒートアップ。さて両軍団が対峙するのはいつ、どんな状況下で……？

戦闘前にもいろいろと……

戦闘に突入する前に描かれるストーリーが、「白い魔女」に捕まった次男エドマンドの救出劇。その顛末をここで書くことはできないが、これでやっと4人そろった兄弟姉妹たちは、今後の身の振り方を協議することに。最も常識的な意見は長女のスーザンで、「衣装だんすに帰らなければ……」というもの。長男のピーターもどちらかというところに賛成なのだが、ここでも議論をリードするのは末っ子のルーシーで、「タムナスさんを助けなければ……」というもの。そんな末っ子の「正論」の前にコトなかれ主義(?)の主張は後退し、ナルニア国の中で、とにかくイケイケドンドンとなってしまったが、さてその功罪は……？

サンタクロースのプレゼントは？

必死で女王の追跡から逃れようとする4人たちだったが、ソリで追っかけてくる方が早いに決まっている。ついに捕まってしまったと思わず観念したが、実はソリに乗るのは女王だけではない。サンタクロースがいたのだ。アスランの再登場に合わせるかのように100年ぶりにやって来たというサンタクロース（ジェームズ・コスモ）は、4人の子供たちにそれぞれ貴重なプレゼントを……。それがどんな品物かについても、あなたの想像力を十分にかき立ててもらいたいもの……。

戦士たちの姿は？

人間の言葉をしゃべるかわいい動物たちや、「白い魔女」の側につく怖いオオ

カミたちとは別に、多種多様な戦士たち(?)が登場するからこれも見モノ。そしてその姿はこれまたC.S.ルイスが想像力をたくましくして創造したもの。半分人間、半分動物という姿は少し異様だが、その他にもいろいろと……。その戦士たちの姿を楽しむのが第1だが、次に問題となるのはその戦士たちの戦闘力。それは映画を観てのお楽しみに……。

戦闘シーンの迫力は……?

第3部『ロード・オブ・ザ・リングー王の帰還』での戦闘シーンはすごかった。さらに『トロイ』(04年)や『キングダム・オブ・ヘブン』(05年)の戦闘スペクタクルシーンもすごかった。私はこういうシーンが大好き……。したがって、甲冑に身を固め、剣をつき上げた長男ピーター率いるアスラン軍団と「白い魔女」軍団が対峙した場面では、さてこれからどんなスペクタクルが展開されるのかと心をワクワクさせたもの。しかして、そのスペクタクルシーンの迫力は……? 私にはそれはイマイチ迫力不足と思えたが……?

ラストのまとめ方はさすが……

超大作であるため第2作、第3作が予定されている映画は、第1作の終わり方が難しいもの。それは一方では、第1作だけでそれなりの結末をつけて満足感を与えなければならないが、他方ではまだ中途半端だから、第2作を是非観たいという欲望を植えつけなければならないから。その点『人間の条件』全6部(59~61年)は完璧だったが、『戦争と人間』全3部(70~73年)は無理やり3作目で終了させたことがアリアリと見えるもの。

そして、第1作のラストで、思わず観客から「エー」「ウソー」「なんで」という声上がるほど中途半端なところで終わったのが、『ロード・オブ・ザ・リング』の第1作。その点この「第1章」はその反省に立ったのか、ラスト数分の間で実にうまくその結末をつけている。さてそのテクニクとは……?

2006(平成18)年1月18日記